

(財)大阪市文化財協会は、昨年末から大阪府中央区法円坂1丁目で難波宮跡の発掘調査を行ってきました。調査地は国指定史跡である難波宮跡の東側にあたり、北側では「東方官衙」と呼ばれる飛鳥時代の「前期難波宮」(652年～686年)の役所群が見つかっています。今回、東西2箇所(西区・東区)で調査を行い、以下のような成果がありました。

1、大量の遺物を含む谷の発見

東区の南東部で、東西に延びる自然の谷を発見しました。深さ4m以上あり、南半は調査区外に広がります。谷内からは、難波宮が造られる以前の古墳時代の後期後半(6世紀後半)から前期難波宮の時期にかけての遺物が大量に出土しました。谷は難波宮を造る際に一部埋め立てられていました。この発見の意義は、以下の三点です。

第一に、この谷が難波宮をつくる際の地形的な制約となっていたと考えられます。難波宮の周囲には同様の自然の谷がいくつもあり(図4)、これらをさけて宮殿の配置が設計されたことがよくわかります。また、今回この場所で谷を発見したことにより、北側に分布する東方官衙がここまで広がっていなかったことが判明しました。

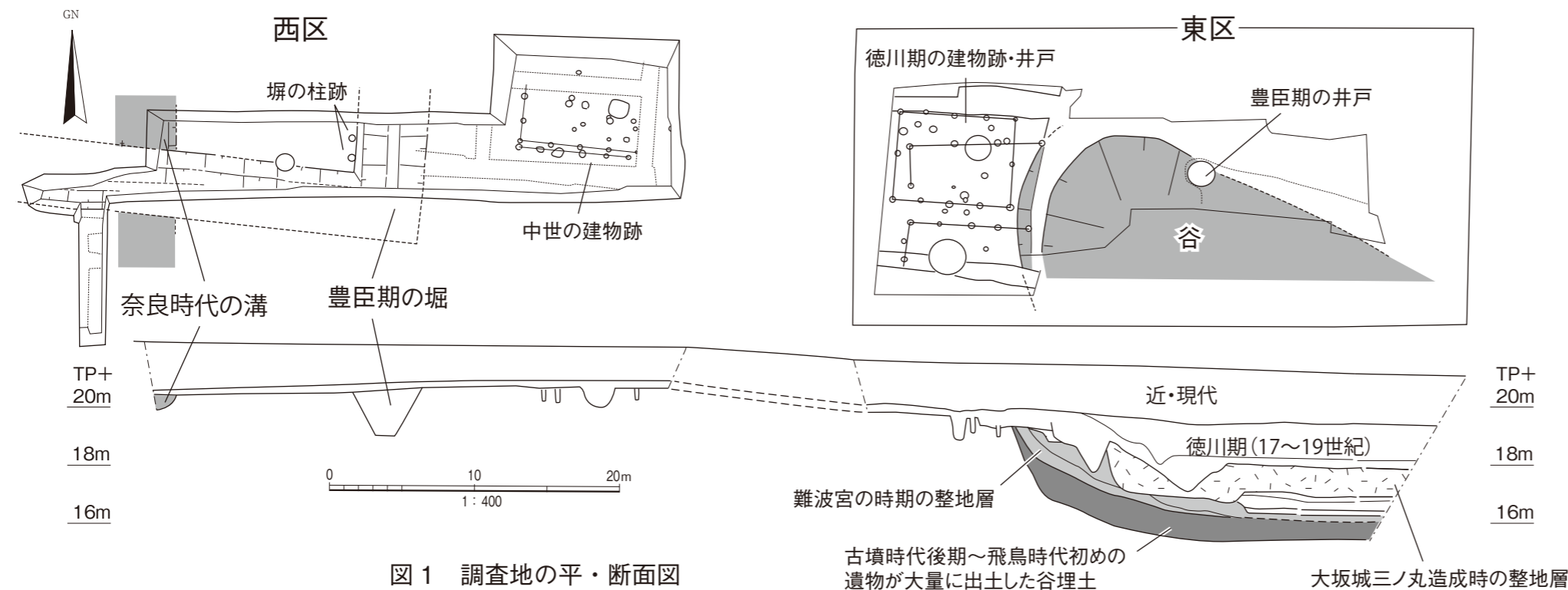


図1 調査地の平・断面図

第二に、谷内から出土した豊富な遺物から、周辺にいた人たちがどのような活動を行っていたのかがわかります。特に、前期難波宮造成直前の地層からは、漆を塗るために使った容器、金属生産に関わるフイゴの羽口はぐちやスラグこうさい(鋳滓)、魚を獲る網おもりの錘、イイダコ壺などが出土し、ここが都となる直前に、さまざまな生業を行う人たちがいたことがわかりました。

第三に、上記と同じ地層から、右図のような新羅土器が出土しました。表面をスタンプ文で装飾した壺の蓋で、新羅との外交によってもたらされた特別な土器と考えられます。難波宮の周辺では、これまで10数点の新羅土器が出土しており、ここが外交上重要な場所であったことがわかります。

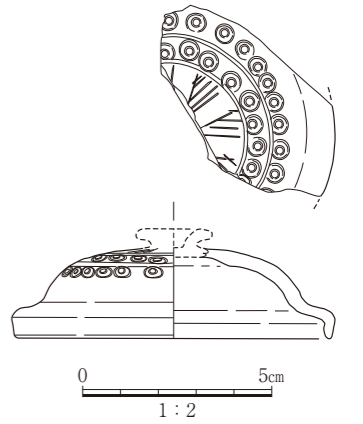


図2 出土した新羅土器

2、奈良時代(後期難波宮)の溝を確認

西区の西端で、奈良時代の南北溝とみられる一部を確認しました。過去の調査でも続きが見つかっており、後期難波宮(726年～784年)の東を区切っていた可能性があります。これを裏付けるように、溝以东では難波宮の時期の建物跡は発見されませんでした。

3、豊臣秀吉による大規模造成と堀

東区の谷を含む低い場所は、近世の初めに大規模な造成により埋め立てられていました。出土遺物の年代観から、豊臣秀吉によって進められた大坂城三ノ丸造成(1598年)によるものと考えられます。また、西区では屋敷地を区画したとみられるほぼ同じ頃の堀が見つかり、大坂城の構造を復元する上で重要な資料が得られました。ほかにも、豊臣氏の栄華きんぱくおしのきがわらをしるばせる金箔押軒瓦や金箔を貼った大皿も出土しています。

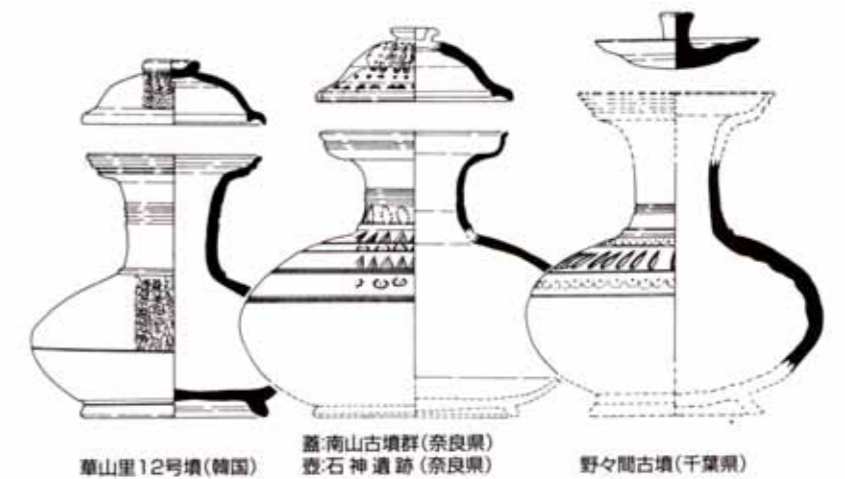
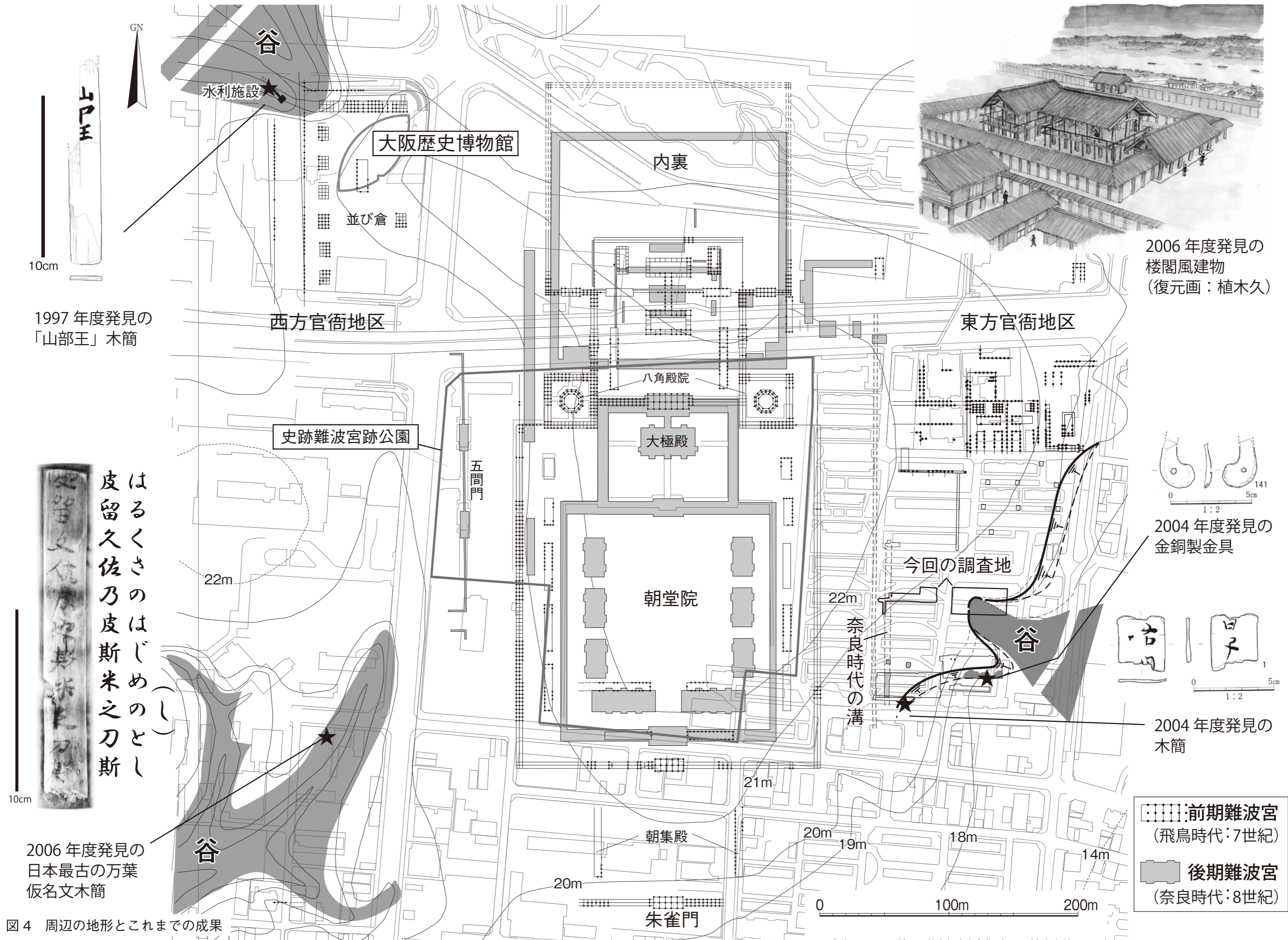


図3 新羅土器の類例(参考)

(江浦洋 1994「海を渡った新羅の土器—土器からみた古代日韓交流の考古学的研究」『ヤマト王権と交流の諸相』、名著出版 より)



1997 年度発見の「山部王」木簡

はるくさの はじめのとし
皮留久佐乃皮斯米之刀斯
10cm

2006 年度発見の日本最古の万葉仮名文木簡

2006 年度発見の楼閣風建物 (復元画：植木久)

2004 年度発見の金銅製金具

2004 年度発見の木簡

[Dotted line pattern] 前期難波宮 (飛鳥時代：7世紀)
 [Solid grey pattern] 後期難波宮 (奈良時代：8世紀)

図4 周辺の地形とこれまでの成果